

## 「罪が戸口で待ち伏せている」

有名な「カインとアベルの物語」です。兄カインが弟アベルを殺してしまうという悲惨な出来事で、「世界最初の殺人事件」とも言われます(「カインが弟アベルに言葉をかけ、二人が野原に着いたとき、カインは弟アベルを襲って殺した。」創世記 4:8)。この事件の後、神はカインを「地上をさまよい、さすらう者」(創世記 4:12)とされます。「その子孫は罪を抱えたままである」という理解から創作意欲を刺激された有島武郎は『カインの末裔』という小説を記しています。

なぜ、カインは弟アベルを殺してしまったのでしょうか。聖書は「主はアベルとその献げ物に目を留められたが、カインとその献げ物には目を留められなかった」(創世記 4:4-5)ことが事の発端だといいます。それがカインの激しい怒りを引き起こした、と。

そして、「カインは激しく怒って顔を伏せた」(創世記 4:5)。「顔を伏せる」とは、神の方を見ないということ。神と共に歩もうとしないということです。神が目を留められたアベルにはたくさんの恵みがあるように見えました。一方、目を留められなかった自分にはそれと比べて恵みはるかに少ないように思えます。嫉妬、妬み、悔恨などの様々な感情が入り交じって、カインは弟アベルを憎むようになります。そして、その原因となった神にまでその怒りを向けてしまったのでしょう。

「主はカインに言われた。『どうして怒るのか。どうして顔を伏せるのか。もしお前が正しいのなら、顔を上げられるはずではないか。』」(創世記 4:6-7)

それでも神はカインのことを見放したりはされません。カインに声をかけ、これまで同様、共に歩もうと望まれます。

もしここで、カインが「世界が多様に創られている」事実気づいていたならば、この後の事件は起こらなかったでしょう。

また、もしかするとカインは「神は平等だ」という悪しき平等主義に陥っていたのかもしれませんが。「同じように献げたのならば、同じように見返りがあるはずだ」と。

しかし、神は確かに公正な方ではあるけれど、人間の現実には不平等があります。その不平等は、「罪」＝神から目をそらさせるように「戸口で待ち伏せており、お前を求める」(創世記 4:7)。イエスの言葉に置き換えるならば、「人から出て来るものこそ、人を汚す。中から、つまり人間の心から、悪い思いが出て来るからである」(マルコによる福音書 7:20-21)。自分の中にある、自分の中から出てくる嫉妬心や妬みに支配されるのではなく、それでも神を神として見上げることによってのみ、私たちは「罪」＝道を外れていくことから逃れることができるのです。

それゆえ、「お前はそれを支配せねばならない」(創世記 4:7)とは、罪を自分の力でねじ伏せることではありません。詩人が「あなたに、あなたのみわたしは罪を犯し／御目に悪事と見られることをしました。あなたの言われることは正しく／あなたの裁きに誤りはありません」(詩編 51:6)と歌うように、自分の中にある弱さや他者への嫉妬心、妬みを素直に認め、神の前に差し出すことによって解放されていくということなのです。

今、生きている私たちの境遇が多様であるように、先人たちの境遇も多様でした。時には理不尽に怒り、不平等を嘆くこともあったでしょう。一線を越えそうになることもあったかもしれません。それでも、踏みとどまって神を見上げ、家族を愛し、隣人と共に歩み続けられました。その背中が、その足跡が私たちを導いています。

確かに今日も「罪は戸口で待ち伏せており、お前を求め」ています。その中であってなお私たちは神を見上げ、「言葉や口先だけではなく、行いをもって誠実に愛し合」(ヨハネの手紙一 3:18)うことを通して、この現実の難局を乗り越えていこうではありませんか。

